

白鷺女性部 京都日帰りの旅

松尾芭蕉と頼山陽

ゆかりの地を訪ねて

こんぶくじ  
金福寺

さんしすいめいしよ  
山紫水明處



令和六年十月十五日（火）

## 日程

集合 (8:15)

JR 新大阪駅正面口 1 階大型バス駐車場

## 出発

- 新大阪 (8:30) — <新御堂筋、名神道> —
- 桂川 PA (休憩 9:30~9:45) —
- こんぶくじ 金福寺 (参拝 10:15~11:15) —
- しょうざんリゾート (昼食 11:45~13:00) —
- 頼山陽 さんしすいめいしよ 書斎山紫水明處 (見学 13:30~14:30) —
- おたべ本館 (見学、買物 15:00~15:40) —
- <名神道、新御堂> — 新大阪駅 (17:00頃)

◆当日道路状況により行程、時間を変更する場合があります。



## 一、松尾芭蕉 正保元年(一六四四)~元禄七年(一六九四) 五十一歳



江戸時代前期の俳人。伊賀(三重県)上野の人。松尾与左衛門の次男として出生、兄と姉、妹三人の六人兄弟。城主一族の藤堂良忠(俳号蝉吟)につかえて俳諧の影響を受け蝉吟の死後、京都で俳諧・古典を学びさらに江戸に出て深川の芭蕉庵に住み俳諧師として身をたてました。

## ☆『おくのほそ道』の旅 芭蕉 四十六歳

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也と冒頭より始まる「おくのほそ道」は芭蕉が元禄二年(一六八九)三月二十七日に、門人の曾良を伴い江戸深川を出発し奥州・北陸の名所、旧跡を巡り八月二十日に大垣に至るまでの紀行を発句を交えて記したものです。おおよそ百五十日(五か月間)その道のりは二千四百キロ、一日三十キロ~四十キロを歩く日もあったようです。※資料の地図を参照下さい

## ☆金福寺(こんぶくじ)

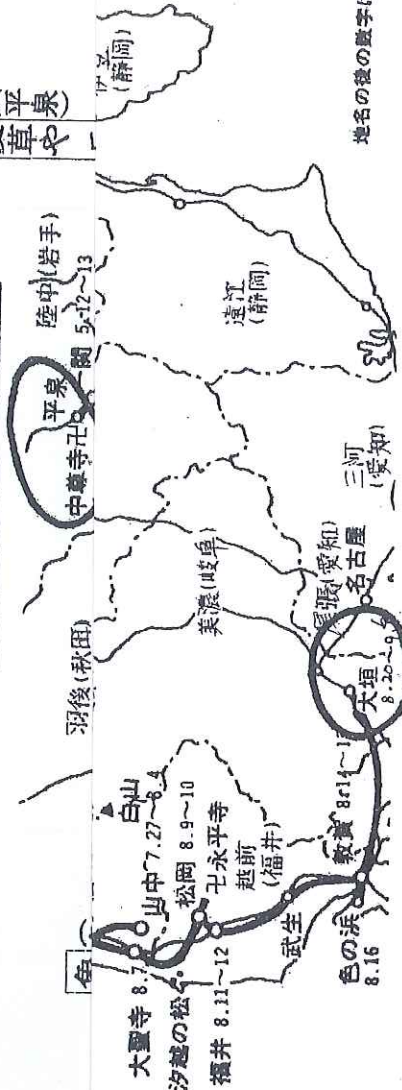
平安時代の貞観六年(八六四)慈覚大師円仁の遺志を継ぎ安惠僧都により創建。元禄年間に再興した鉄舟和尚と松尾芭蕉が訪ねた際に親交を深めたという芭蕉庵を、後に芭蕉を敬慕する与謝蕪村が再興する。紅葉が美しい。背後の丘に蕪村ら俳人の墓や句碑がある。又、船橋聖一著の「花の生涯」のヒロイン村山たか女が尼となり生涯を終えた寺でもある。

奥

住替わる代ぞ 雛の家

夏草や (平泉)

(中尊寺) 五月雨の降りのこしてや光堂



蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ (大垣)

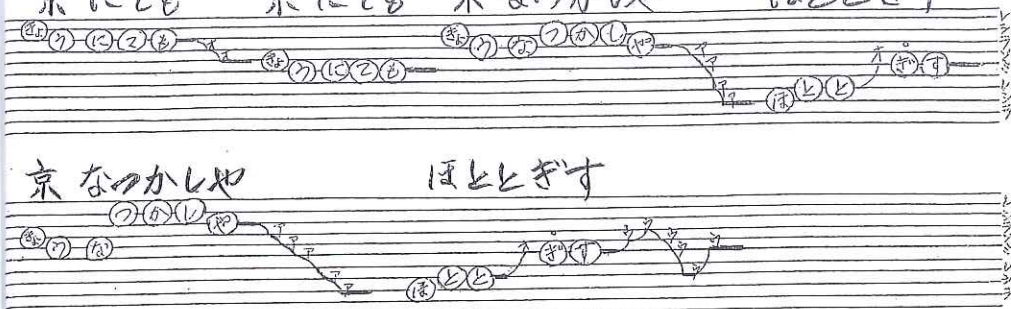
地名の後の数字は宿泊日(解向)

(陽旋法)

京にて

松尾芭蕉

京にて 京にて 京なつかしや ほととぎす



☆芭蕉享年五十一

帰郷途中の元禄七年(一六九四)九月大阪で発病し十月十二日御堂前花屋仁右衛門宅で息を引き取り、遺言にて大津市義仲寺に埋葬された。

病中吟 (旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る) を示す

☆『幻住庵記』(げんじゅうあんのみき) 芭蕉 四十七歳

元禄三年(一六九〇)四月〜七月まで滞在した石山の奥、国分山の近津尾神社境内にある小庵幻住庵での生活を記した。芭蕉俳文中の秀作とされる。

京にて 京なつかしや ほととぎす

[句意] 見慣れた京の町だが

ほととぎすの声を

昔の京の人達も聞いていたのだなあと 懐かしく感じると詠んでいます。

# 奥の細道紀行図

行く春や鳥啼き魚の目は泪 (千住)

草の戸も住替わる代ぞ 鮒 (深川)

田一枚植えて立去る柳かな (那須・遊行柳)

閑さや岩にしみ入る 鮎の声 (立石寺)

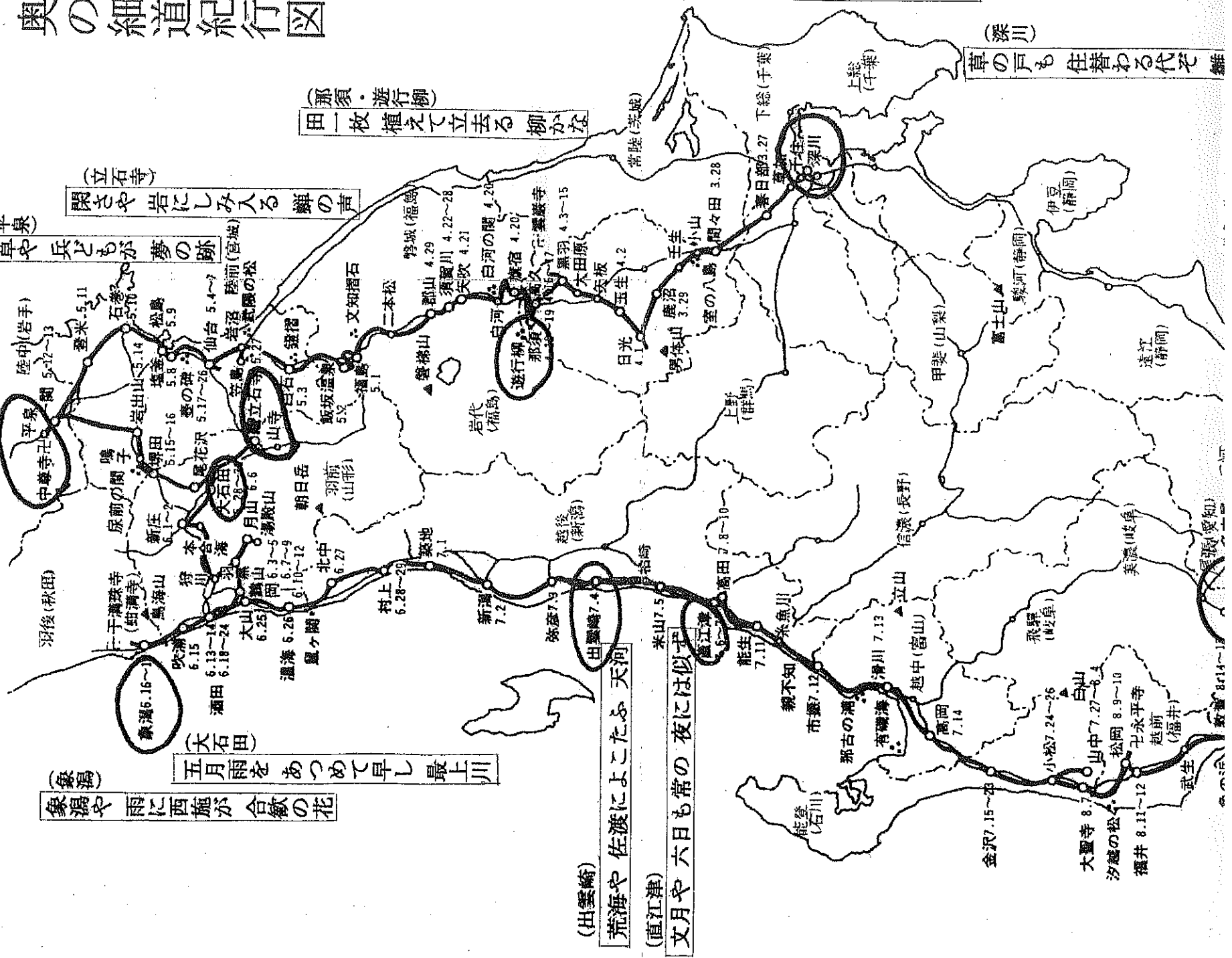
夏草や兵どもが夢の跡 (平泉)

(中尊寺) 五月雨の降りのかしてや光堂

(大石田) 五月雨をあつめて早し最上川

(象潟) 象潟や雨に西施が合歓の花

(出雲崎) 荒海や佐渡によこたふ 天河  
 (直江津) 文月や六日も常の夜には似ず



二、頼 山陽 安永九年(一七八〇)〜天保三年(一八三二)五十三歳



江戸後期の儒者・漢詩人・教育者。

広島県竹原市の人で安芸藩儒者の父春水と、儒医を父にもつ母梅颯(ばいし)との長男として大坂に生まれる。少年時代から詩文を得意とし周囲を驚かせた。十八歳で江戸の昌平黌学問所で学んだが一年で広島へ帰ります。

山陽二十一歳、父春水が江戸詰めとなった留守中、脱藩をはかり京都へ出奔するも捕らえられ四年間自邸に幽閉され外に出ることも許されず、学問に没頭し明治維新の原動力となった著書「日本外史」の初稿を書きあげます。

☆ 山紫水明處(さんしすいめいしよ)

文化八年(一八一二)三十二歳のころから京都へ出て転居を繰り返して、眺望の気に入った現在の鴨川上流西岸の三本木に定住し、書齋「山紫水明處」という塾を開き、子弟の育成と自分の学問に励んだ。

山陽はこの屋敷地を「水西荘」と名付け、庭にウメ、サクラ、モモ、ツバキ、ナツメなどの花木、実の成る木を植えた。文政十一年(一八二八)新たに書齋兼茶室を造営。それが今の「山紫水明處」です。鴨川の流れや東山の風情を心行くまで味わえる書齋です。

当時、指折りの知識人で茶の湯にも精通していた山陽は、抹茶より煎茶を好んでいたようで、親しい友人が来ると、脇に流れる鴨川の水を汲んで煎茶を振る舞うなど形式にとらわれず自由な茶の湯を楽しんでいた。「山紫水明處」も煎茶用に明るく開放的な作りとなっています。

☆ 山陽 享年 五十三

天保年間に入った頃から健康を害し咯血を見るなど悪化する中でも著作に専念し最後まで仕事場から離れず、天保三年(一八三二)九月二十三日に波乱の生涯を閉じた。山陽の遺言により、京都東山円山公園内の長楽寺に葬られ、その横には妻梨影、三男三喜三郎の墓が並んでいます。

「奉母遊嵐山」

文政二年(一八一九) 山陽 三十九歳 三月

六十五歳を過ぎた母を伴って嵐山の桜見物に訪れ、夕刻、近くの三軒家に宿をとり母と過ごした日を思い、心に感じて詠ったもの。若気の至りで両親を悲しませたが、父春水が亡くなったから遺された母を不憫に思い孝養をつくした。



～～メモ～～

京にても京なつかしやほととぎす 芭蕉  
句意は

「ほととぎすの鳴く声が聞こえる。この  
声を聞くと自分は今、京にいるのだが  
それでもこの京へのなつかしさに  
心魅かれる思いが湧いてくる」

奉母遊嵐山

頼山陽

不到嵐山已五年。

萬株花木倍鮮妍。

最忻阿母同衾枕。

連夜香雲暖處眠。

母を奉じて嵐山に遊ぶ  
頼山陽

嵐山に到らざること已に五年

万株の花木倍鮮妍

最も忻ぶ阿母と衾枕を同にし

連夜の香雲暖かき処に眠る

嵐山に

到らざること

已に

五年

万株の

花木

倍

鮮妍

最も

忻ぶ

阿母と

衾枕を

同にし

連夜の

香雲

暖かき

処に

眠る

真口細道  
吟行句



小  
生  
記